鎮魂歌

エリー

　バンド演奏（１曲）

聖司「ありがとう。またお会いしましょう」

聖司Ｎ「舞台を降りた僕は、裏口に急いだ。待っていた車に飛び乗ると、ホテルに行き先をセットした。車は勢いよく滑り出した。一人きりの車内で、鏡を取り出し、化粧を直した」

聖司「お待たせしました。どうぞ始めてください」

聖司Ｎ「居心地の良いソファーに座り、水を口に含むと、僕は質問に耳を傾けた」

聖司「まずは、自己紹介からですね。わかりました。川上聖司６６歳。横浜の自由区にある常設ステージでバンド歌手をしています。それから、父親の後を継いで、今日のテーマである葬儀歌手もちょっとだけしています」
聖司「ええ、ツアーで全国を回ることもありますが、デビュー当時から続けているのは、いろんな人たちが出る舞台に立つことです」
聖司「そうです。常設舞台では人気によって出番が変わります。人気が出るほど出番は遅くなります。僕たちもトップバッターから始まって、とりを勤めるようになりました。とりを勤めるようになって４０年くらいでしょうか。ありがたいことに、結構長く続いています」
聖司「ありがとう。最後を飾り続けることはすごいことなのかもしれませんが、僕としては出番がいつでも一生懸命歌うだけなので特に意識したことはないですね」

聖司Ｎ「自己紹介が終わり、葬儀歌手について尋ねられた」

聖司「葬儀歌手というのは、保護区の成り立ちに深く関係している役割です。ご存知の方も多いと思いますが、昔、国土を保護するために立ち入り禁止の保護地域が設定されて、そこに住む人たちは自由な移動が禁止されました。動けないというより、動かずにすむための法律が整備された。しかし、特定の宗教を持ち込むことは難しかったため、村人たちの手で葬られる昔ながらの葬儀の姿が復活しました。お墓も人数分だけ建てることは難しく、通夜と火葬は行っても、個別葬儀までは手が回らなかったため、村に一つだけ墓を建てて８月に合同葬儀をすることになったんですね。そこで、お経の変わりに自然発生的に生まれたのが歌だった。そして、歌の後には先祖の霊と交流するための宴も自然発生的に始まりました」
聖司「どうなんでしょう？　最初は歌のうまい人が歌いだして、みんなで歌っていた時期もあったらしいですけど、やがて特定の人が役目として勤めるようになった。僕の父は区長だったんですが、葬儀歌手でもあって、隣と奥の村の葬儀にも呼ばれていましたね」

聖司「ええ、そうです。父が亡くなったとき、区長の補助を勤めていた兄が、僕に頼んだらいいんじゃないかということで、特別に許可をいただいて８月になると故郷を訪ねることになりました」
聖司「葬儀歌手を頼まれての感想ですか？　そうですねえ、最初は嬉しかったと思います。歌手として認められた感じがしたし、自由区に出て一生会えないと思っていた家族にも会えるんですから」
聖司「マイナス部分ですか？　ええ、ありましたよ。やっぱり保護区の人間ではないわけですから、迷いというんでしょうか。そういうのはありました」

聖司Ｎ「話題は葬儀歌手から先祖の霊に及んでいった」

聖司「小さいころから死んだら山に行って、村を守る霊になるという話を聞かされて育ったわけですが、僕自身は信じきることができなくて。自由区にでてバンド歌手になってからは特にそうですね。美しい物語だとは思うんですが、その流れの中に身をおくことはできないというか、どう言ったらいいんでしょうか、違和感を感じてしまう。そんな自分が葬儀歌手として歌っていいものなのかという迷いはありましたね。それはだんだん広がっていって、歌手自体、歌うこと自体に対する疑問につながっていって、僕ってなんなんだろうって気分に陥ったことはありましたね」
聖司「若かった。そうかもしれません。意味とかを深刻に求めてしまう。舞台に立てることとか、奇跡的に成り立っていることには目も向けず、無いもの無いもの求めてしまう。そんな感じだったのかもしれませんね。もっと大きな舞台とどんどん目指していって叶えてきたんだけど、その先がなくなってしまったときに、葬儀歌手という新しい役割もチャンスではなくなってしまって。重くなってしまった」
聖司「やっぱり葬儀歌手という立場上、死者との思い出とか、死に対する不安とか、いろんな話を聞くことが多くて、歌うだけじゃすまないわけですよ。先祖との交流もある。そんな中で、僕に何ができるのか、僕なんかが果たしていいのか、そんな風に迷ってしまって」
聖司「やめることは簡単なんだけど、歌えなくなるまで続けてみるのも悪くないかなと思いまして。まさか６６歳まで歌うことになるとは思ってなかったんですが（笑い）」

聖司Ｎ「笑いに包まれると親密さは一気に増した」

聖司「小さいころですか？　そうですね。兄という人が本当に強い人で、面倒見もよくて、僕はいつも兄にくっついていく感じでしたね。こう、チョロチョロと後ろをついていくような」
聖司「ええ、とても仲はよかったですよ。父は山仕事の責任者で、その流れで区長を引き受けた。そんな父の強い面を全て兄が持っていて。兄自身も父の後を継いで山に入るつもりで、卒寮後すぐに保護区に戻っていった。でも怪我をしてしまって山仕事ができなくなって。５歳違いですから、怪我したころはまだ僕は保護区にいて、僕のほうが悲嘆にくれてしまって。もう兄を頼っ

ていちゃ駄目だ。僕がしっかりしなくちゃと思う反面、山仕事には興味が持てなくて、父の後を継いで区長になる気持ちもなくて、保護区に居場所はないなあなんて感じてしまって。兄の方が大変なのに、自分のことばかり考えちゃう自分も嫌で、なんかよりいっそう無口な子になっていましたね」

聖司N「話は自由区に出たころに及んだ」

聖司「なんていうか、思い切って自分を表現してみたくなったんですね。それまでしたことがないこと、経験がないことを求めて、寮で知り合った仲間と自由区に出た」
聖司「そうです。先に卒寮したメンバーと合流して、横浜の無法地帯に近い場所に住んで、アルバイトしながらキリキリの生活をしてましたねえ。なんていうか、アルバイトに出ても続かなくて、食べられなくて、でも楽しくて」
聖司「そうですね。メンバーの力は大きかったと思います。一人だったら、ここまで続いてなかっただろうし、自由区に出る決意さえつかなかったかもしれません」

聖司N「話題は歌手デビューに移った」

聖司「舞台に立つためには、翌週の出演者を決めるためのオーディションに受からないといけないんですね。僕たちはメンバーとバンドスタイルで挑戦したわけですが、見せ方を工夫して、とにかく目立つことを考えたら一回で合格しましたね」
聖司「いえいえ、運が良かったんだと思います。新しいものは受け入れられやすいんですよ。その代わり、２回目以降が難しかったですね。毎回新しいアイデアを考えたり、舞台に立つことで鍛えられました」
聖司「そうですねえ、１年後にはわりとコンスタントに出演できるようになって、年間契約を結んでいただけるようになりました」
聖司「平日に創作活動をして、週末に舞台に立つ。そんなサイクルが出来上がっていきましたね」
聖司「ええ、最初からオリジナル曲をやっていました。途中から作詞も手がけるようになって、演出とかも自分たちで考えて、かなり自由にやらしてもらっていましたね」
聖司「ライブハウスツアーにでるようになったのは、３年目くらいからですね。契約の形態が変わって、スケジュールに余裕ができて、東京、横浜、名古屋、大阪、博多の５大国際都市を回ることになりました」
聖司「もちろん嬉しかったですし、お客さんが入るか緊張もしましたね。ワンマンだから時間も長いし、自分たちを見に来るお客さんしかいないわけで」
聖司「ええ、おかげさまで最初から売り切れ続出でしたね。会場も、ライブハウスからホールに変わっていったし、結構厳しいときもあったんだけど、振り返ると割りと順調っていう感じですかね」

聖司Ｎ「再び葬儀歌手の話に戻った」

聖司「そんな風にバンド歌手を経て、父の死をきっかけに葬儀歌手を継いで、お墓の前で歌うようになったわけです」
聖司「違いですか。そうですね。バンドは生きている人間に対してアピールしているわけで、楽しめるようにいつもとちがうこと、これまでにないことを目指すわけです。葬儀歌手は、僕の場合、思慕の気持ちを死者に伝えるために歌っているので、珍しさや新しさよりも、気持ちの深さというか、強さというか、いかに感情を込められるかでしょうか」
聖司「そう、無伴奏。アカペラで歌います。いつもはメンバーの音に支えられてテンションを上げていくわけですが、保護区に入れるのは僕一人ですから、そして第一声で印象が決まってしまうものですから、いきなり頂点を目指さなければならないわけです。どちらも難しさはあると思うんですが、体調や気分の影響を受けやすいのは葬儀歌手の方ですかね。ごまかしがきかない。自分自身が出てしまう」
聖司「最後に一曲、ここで歌うんですか？　ええ、いいですよ」

　　鎮魂歌（１曲）

聖司Ｎ「歌い終わると拍手に包まれた」

聖司「こちらこそ、お世話になりました。今日はありがとうございます。おつかれさまでした」